

友達の輪

佐藤真理子

聖書は人に真の自由を与える。しかし権威主義や閉鎖性が入り込んだとき、教会は人を縛る暴力となる。

神学生となってから、私にとって教会内や神学校内でのセクシャルハラスメントの問題は避けがたいものとなった。

この問題は公に語られることがあまりなく、当事者は孤独を強いられる。愛と許しが語られる中、それができない自分を責め続けるのである。そのような状況ゆえ、私はセクハラを責めずにそれを忘れることを強いられてきた。しかしある時それは本当の愛ではないことにはっきりと気づいた。教会での情欲や姦淫の問題は、光の下に、明るみに出すべきだということをこの御言葉で示され、大きな希望が与えられた。

「悪を行う者はみな、光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光の方に来ない。しかし、真理を行う者は、その行いが神にあってなされたことが明らかになるように、光の方に来る。ヨハネの福音書 3章 20—21 節」

加害者が自分の悪を認識できなければ、誰かが犠牲になり続ける。そのままでは、加害者は一生誰かを傷つけながら生きるしかないのである。神は、人を光で包んだとき、その人の罪を照らしだす。その罪を悔い改めるよう導き、神の喜ぶ生き方へと変えるのが神の愛だ。

人を情欲の対象にすることは暴力と同じである。問題について公にされず誰も止めなければ、それは暴力に加担することになるのだ。

私は何度も教会や神学校にいるのが苦しくなった。なぜ義を謳う場所で被害者の

方が苦しまなければならないのだろうか。そのような状況こそが絶対に義ではないのだ。キリストは情欲の目で人を見ること自体に警鐘を鳴らしている。なされた事柄以上に、自分の抱えている思いそのものが悪いものだという自覚が加害者に全くないことが問題なのである。

内に問題を秘めたものにし、被害者を増やすのを食い止めないことは、闇を闇のままにすることだ。光のあるところに希望があるというのが、私に与えられた確信だ。

今回は 40 年来のクリスチャンである母、佐藤洋子が世代間の性差別の問題意識の差について書く予定です。

(さとう まりこ

トランスワールドラジオメッセンジャー)

